



# フレネ学校訪問記

文  
写  
真  
・永  
野  
琢  
也  
(広島大学学校教育学部  
小学校教員養成課程 美術領域)  
Nagano, Takuya

集会の一場面 学校で飼う鶏のたまご代の集金

したイノシシのこと、自作の詩の朗読、みんなの前で話そうと温めてきたいろいろな話題、あるいは作文が発表される。ある女の子は、ビンの中に酢と油を混ぜて持つて来た。当然、油は上に浮いてはつきりと二層にわかれている。家で料理を手伝つていたら、酢の上に油が浮いていたのを発見し、それをみんなにも見せたくて持つて来たらしい。一通り教室のみんなに見せてまわつた後、カルメンが、いろいろと言葉を掛けしていく。

「振つたらどうなるの」

「ほかのものを混ぜてみたらどうかしら」等々。

この後、ビンは低学年クラスにも回覧され、新たに酢と水などで実験してみることが決まった。

このようにして、日常生活の至る所にあふれている、子供の興味・関心を効果的に学習へと結び付けるのである。

学校の話題を家庭に持ち帰つて話す子供の笑顔は日本でも見られるものであろう。しかし、フレネ学校にはその反対もある。家庭であったことを学校の授業において発表する場が保証されているのである。

学校の共同体的生活

関心の高かつた作文や詩の中から一占  
選び、これを国語のテキストとする  
方法がとられる。さらに、このテキスト  
は手刷りの印刷器で子供たち自身の  
手により印刷され、文集としてまとめ  
られる。できた文集は他の学校と交換  
され、子供たちが、「新たな興味をおこ  
すきっかけとなつていて」「印刷器を学  
校へ!」のスローガンに始まつたフレ  
ネ教育の原点を確認することができた。  

# 学校の共同体的生活

人間関係の歪みから生じるいじめ、不登校、体罰、主体性の欠落・・・、私たちの国の教育は、病んでいる。こうした今の日本の教育が抱えている問題を解決するヒントがフレネ学校にある。が、「日本もこれを導入すべきだ」と単純に考えてはいけない。むしろ私は、地中海の乾いた空気までは日本に持ち込めないので同じように、フランスという歴史と文化に立脚するこの教育法をそのまま日本に導入することは不可能ではないかとさえ思っている。

「サッカーボールは今〇〇君の私物だが、学校で購入してはどうだろう」「普段、サッカーボールは放置されているので公共のものであれば、保管場所が必要だと思う」

「保管場所を新たに作る必要がある」

結局、サッカーボールの値段を提案者が調べてからこの議題について再び話し合うことが決まった。

また、この集会では自分の仕事をこなしていない人、他人に迷惑を掛けている人は容赦なく批判され、全員から行動の変容を要求される。そこに妥協はない。

私がフレネ学校で見た  
一日中

生き生きと活動する  
子供たちの姿。

日本の学校でも

こんな姿が見られるよう  
努めていきたい。

この旅は、そんなことを一層強く考  
えるきっかけになつた。

最後にこの旅を支えてくれた両親に  
感謝しつつ筆をおく。



学校のシンボル「パパ・フレネの木」に子供たちと登る筆者(中央)

くはひろかるハカンア地带 ニートタ  
ジユール。フレネ学校は、そこから少し内陸に入つた陶器の街、ヴァンヌの郊外にある。細く曲がりくねつた坂道を上つていくと、住宅地の中に突然「ECOLE FREINET (フレネ学校)」の看板が目に飛び込んでくる。



移がをくわる「COOL-KNOW」の看板

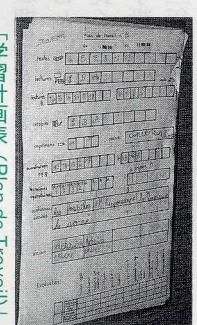
教室

ラス（三～五歳）、低学年クラス（五～八歳）、高学年クラス（八～十三歳）の三つで、それぞれ二十人程度が学んでいる。私たちがはじめに参観したのは、高学年のクラスであった。

子供たちはそれぞれ違う学習をしている。ある子供は算数。別の子供は、おもりを天秤に乗せ、釣り合いをとるうと必死である。どうやら理科の実験らしい。床に模造紙を広げて絵を描いている子供もいる。ベンチに座って、声を出して本を読んでいる女の子。上級生と思われる子供がそれを聞いてあげている。このクラスの担任であるカルメン（子供たちに習って「先生」はあってつけない）は、常に子供たちの中にいて、机の間をまわり助言をした

こうした子供たちの姿には、自ら「している」という主体性を感じられる。「やらされる」のではなく、自分から率先して行動するからこそ楽しみも生まれる。

私は、こうした主体性の育まれる要因の一つを、子供たちの机上に常にあらわす「学習計画表」ではないかと考えている。この表にそつて自ら二週間の学習計画を立て、それを自ら評価するパターンがこの学校では確立している。子供たちは、この自己評価の過程で必ずと主体性を獲得しているのではないか。



「新圖畫」(Plan de Travail)

石畳の道をゆづくり踏みしめながら、教室へと向かつた。すると、子供たちは朝の学習の最中にもかかわらず、空越しに私たちを見つけ、「Bonjour!」  
「I'm sorry!」  
「I'm sorry!」

り質問に答えたりしている。  
教室の風景は、ちょうど日本の学校  
の自習の時間に似ている。ただ、常に  
子供の学習内容がおののおの自由である  
ということ、そして、子供が楽しんで  
自習していくところが、日本と違っている。

私自身の小学校時代はといえば、自習時間には常に私語が飛び交い、四十五分がとても長く感じられた。しかし、ここでは私語もほとんど無く、最大で二時間も続く学習時間を自ら何をすべきか考へ、時には上手に休息も取りながら、よく遊びよく学び、「学校生活」の全部を楽しんでいるよう見えた。